

さまよう町のさまよう家のさまよう人々

国枝史郎

青空文庫

一

夜にはあらし

霧ふかき昼なりき

町は霧にて埋うずもれたり

霧町に降り

降りたる霧町を埋めたり

日はあれど

月より朧おぼろにて

家あれど

墓より陰影的なりき

葬礼の列なりや

そこに、ここに、行く者は？

あらし

歩める人の群なりき

昼の鐘遠くきこえ

夜の鐘に似たれども

ただ似たるなり

霧ふかき町なれば

鐘の音迷えるなり

玩具屋ありき

会堂ありき

塔ありき

円天上の大学ありき

霧の奥にありき

堀割よ

なぜに短艇^{ボート}を浮かべざるや？

いないな短艇浮かび、処女乗り、少年笛ふけど、
霧ふかければ、見えざるなりき

貴族の家に温室ありき

アラセイト——

蘭

アマリリス

レザ

白鳥花

フリジャ

シネンセス

蟹手草

キク

スイートピー

霧の中の温室

温室の中の花

花の中の茶卓

茶卓に添える籐椅子

籐椅子によれる貴族

貴族により添える胸

乳房

唇

しかれども霧！

町々

露路

十字路

噴水

ベンチ

陰影にあらざるものはあらざりき

霧降る

放火——霧に咲く花！

姦淫かんいん——霧の誘惑！

ひと殺し——霧の秘密！

——町、霧に埋うもれたり——

郵便脚夫は

霧のポストより

霧のごと果敢はかなき

恋文いだし

霧のごと弱き

乙女に与えき

乙女泣きける

霧

霧

霧

霧

かかる会話ありき

霧の中にて……

女「愛し給うや？」
たも

男「……………」

霧

沈黙

男「愛し給うや？」

女「……………」

霧

一一

沈黙

女「この薔薇を御身の飾穴へ」

男「……………」

沈黙

霧

男「この^{ひっしゅ}ヒ首を御身の乳の下へ」

女「……………」

かかる会話ありき

霧の中にて……

出納係「盗んだ」

受附の女「妾わたしの情夫」

出納係「駆落だ！」

受附の女「何処へ？」

出納係「さあ直すぐにだ」

受附の女「ちよつと社長さんへ」

出納係「畜生！」

受附の女「あの課長さんへも」

出納係「幾人あるんだ」

受附の女「あの妾より二つ年下の給仕へも」

出納係「盗まなければよかった！ 霧め！」

受附の女「云いつけてやろう。……妾は出世する」

出納係「殺すことにきめた！」

受附の女「霧！ 白血球の霧！ お母さん！」

かかる会話ありき

霧の中にて……

老人「生き過ぎたよ」

嬰兒「産まれたばかりだ」

人妻「退屈していますのよ」

姦夫「そこが俺のつけ込みどころさ」

かかる絵画ありき

霧の中に――

一つの寝台

解剖台

横倒われる女

メスを持てる外科医

腑わけ

幽暗なる室内には窓さえあらし

.....

.....

.....

皮を剥ぐにや？

.....

心臓をえぐるにや？

.....

.....

？ ？

！ ！

.....

.....

「え、どうだ、この陰毛は！」

.....

解剖台と

外科医と

横倒われる女と

窓無き部屋に充ちたる立合いの人々の顔の奇怪さ

興味と、期待と、奇蹟と、確証とを待つ顔

.....

.....

人妻らしい女

頰廃したる肌の色

.....

.....

姦婦の表情

姦夫は？

かかる音楽ありき

霧の中に――

短嬰しゅいべな調にて始まりしが

音律なかばにて崩れたり

ヴェトーヴェンの如く英雄的には非あらざりしが、メンデルスゾーンの如く葬礼式にても
非ざりき

さりとして

シヨパンの如くにても、

.....

.....

.....

かかる音楽！

.....

.....

モツアルトとコンスタンツエ夫人との恋にも似たる

.....

.....

三一

かかる建築ありき

霧の中に.....

窓あれども

.....

.....

部屋あれども

.....

「で、要するに、この……の中へ、文字を入れればいいのです。この詩はイバニエス氏の詩なんです。そうです西班牙スペインの神秘派の詩人、若くて生きているイバニエス氏の詩なんです。そうしてイバニエス氏は詩の所々ところどころを、いつもこんなように……にして、ぼかしてしましまう癖を持っているのです。——ところがどうでしょうこの私ですが、この……になっ
ている所々へ、恰度ちやうどあてはめるにいいような、不思議な建築や変わった会話や、異様な絵画や奇怪きがいな音楽に、ぶつかつたじやありませんか。よろしい、そこでお話ししましょう。
ああ併しかしちよつと待つて下さい、その前に私はもう一つだけ、イバニエス氏の極きわめて科学的の詩を、ご紹介して置きたいのですから。それはこういう詩なんです。……

複滑車の理を説明せよ
ことわり

第一種

車の個数 n 個にして

その中半数は定滑車なり
うち

残りの半数は動滑車とす

然る時は定滑車は原則として
力を減ずること能わざれども
動滑車は一枚につき二分の一ずつの力を減ずるを得るとなす

齒車を説明せよ

齒車は一名齒輪しりんという

機械に於ける母体なり

A 及び B なる円盤に

齒を具備するものを想像したまえ

これを想像的円えんという

想像的円えん、即ちすなわ、ピッチ円、

齒を適当に作りなば

A の運動をいとも正確に

B に伝うるを得るとす

スパー
正齒輪とは？

ベベル
歪齒輪とは？

ウオーム
螺旋齒輪とは？

ラッキ
齒條とは？

文明を作り

文明を野蛮にし

.....

.....

.....

高速度女によにん 人虐殺の工場となす

コルニツシュ汽罐

ランカシャアー汽罐

フアーネストドア
戸

炬

プレッシユゲージ
圧力計
オーターゲージ
量水器
フライホイール
節動輪

されども
セーフティヴァルブ
安全弁はあらし

.....

.....

光学応用

絃の振動

PI/du

「みんな関係があるのです、そうです私の物語の筋に、いや私の経験談に、よろしい、そこでお話ししましょう」

四

それは上海での出来事なのです。その日は或る用件で、英国租界や米国租界や仏蘭西^{フランス}租界を歩き廻わっていました。

と云うと貴郎^{あひた}は私という人間が、何者であるかお知りになりたいでしょうね。

さよう、云つてもよいのです。

が、しばらくは黙つていきましょう。いや或は永久に、黙っているかもしれないなあ。

ですから貴方は私という人間を、詩人と思つてもよろしければ、国際的密偵と思つてもよく、漫遊者と思つてもよいのです。ひよつとすると私は考古学者——それも主として東洋の諸国、それもすつかり亡びて了^{しま}つた、楼蘭^{ろうらん}だの回^{かい}乞^{こう}だのというような古代の国々のことを、古瓦や鏃や骨片などを基とし、研究している考古学者だと、そう思つてもよろしいのです。もし又私が貴郎の眼に、大変な悪漢にうつるようでしたら、国際娘を諸国へ輸出入する、ゼゲンと見立ててもかまいません。

その日は秋のはじめでした。租界に添つて流れている河——黄浦^{ホアンプ}河の岸の並木の葉は、

もう少し色づいて居りましたつけ。

目的の仕事が片付いたので、私は黄浦河の岸へ出て、並木の一本へよっかかって、河を見ながら煙草を喫っていました。

これも目的の一つとして、私はそれから数日の後には、黄浦河を下り呉淞^{ウースン}へ出、それから西して揚子江^{さかのぼ}を溯り、鎮江^{チンキヤン}、南京^{ナンキン}、蕪湖^{ウーフー}、九江^{キユーキヤン}、漢口^{ハンカオ}、岳州^{ヨウチョウ}、沙市^{ヤシあたり}の辺へまで、旅行をしなければならなかったので、大いに勇気づいていたのでした。

時刻から云えば夕暮で、二百間あまりもありましようか、そんなにも広い黄浦河に、碇泊している軍艦や商船へ、そろそろ燈がつく頃でした。

(今日はこれから何うしたものだ)

遊びのことを考えていたのでした。

旅行をしたらそうノウノウと、遊び廻^{うち}わることは出来ないだろう、今の中に思^ううさま遊んで置^こうと、こう思^っていたからです。

(打^{ダー}鶏^チ 私娼^{ダーチ}買^イいにも少し倦^あきて了^つたし、書^げ芸^い妓^し家^やへ行^くのも平^{へい}凡^{ぼん}だし、ダンホールや酒場へ行^つたところで、変^わわつた興^き味^みもあるまいし、ひとつ開^{かい}封^{ふう}路^ろの春^{はる}華^わ舞^ぶ台^{たい}へでも行^つて、グロテスクの芝^{しば}居^ぐでも見^てやろうか)

などと考えておりました。

と、その時私の横へ、一人の男が寄つて来ましたが、

「失礼ですが日本の方ですな」

と、これも本物の日本語で、こう話しかけたじゃありませんか。

「さよう」

と私は云つてやりました。

「あなたも日本の方でしょうか」

「そうです」

とその男は云いました。「久しく当地にご滞在ですか？」

「……………」

私は微笑をしたばかりで、そうだかもそうで無いとも答えませんでした。うっかりそんなことに返事をする、それからそれと尋ねますからな。どこに泊まっているか、名は何人というか、今どんな商売をしているか？ そうしたあげく金を貸せだの、面白い所へ案内しようかだのと、云い出すことは知れているからです。

上海あたりにブラツいていて、紹介もないのに慣れ慣れしく、そんなように突然話しか

けるような、そういう日本の人間は、九十パーセント迄碌まろくでもない、食い詰め者の無頼漢ですからなあ。

勿論私という人間は、そんな人間にビクツクような、そんな人間では無いのですが——又そんな臆病な人間なら、今やつている職業なんか、出来るものじゃアないのですが、併しそんなような人間に、たとえ僅わずかの間であろうと、甘く見られるのが厭いやだったので、そんな場合に心得のある男が、きまつて取る態度の微笑と沈黙とで、応酬してやったという次第です。

と、その男は黙つて了いました。しつこく訊ねようとしませんのです。私の心持が解つたからですか。

その間に私はその男を、仔細に観察してやりました。

その結果私は、

(おや)と思いました。(この男は決して月並の、上海ゴロでは無さそうだ。いや、善良な人間らしい。零落した貴族の若様で、ひどく悩んでいる人間らしい)

五

広い額、端麗な鼻、弓形をしている上品の口、色は白皙で髪が漆黒で、それを真中から分けている。少し古くはあつたけれど、よごれめの無い折目正しい背広、年は二十八九歳でした。特に私の眼を引いたのは、愁うれいを持ちながらも濁っていない、理智的というよりも情熱的の、その青年の立派な眼でした。

(こういう眼を持つている青年に、悪い人間というものは滅多に無い)

そう私は思いました。

そこで私は警戒を解いて、私の方から話しかけて見ました。

「上海に長くお住居ですか」

「ええ、相当永く居ります」

「何か研究でもなされているので？」

「研究？ それは昔のことです」

そう云った時その青年の眼に、自分自身を嘲あざけるような、自分自身を憐れむような、そういう表情が表われました。

「内地の大学に居りました頃にはね、私も何かしら研究したものです。……流行の社会科

学なども。……が、今じやあメチャクチャです」

「よろしかったら私の宿へ来て、いかがです茶でも召しあがったら」

とうとう私はこんなことを、その青年にすすめて了いました。私としては曾て無いこと
で、よくよくどうもその青年が、私の氣に入つて了つたからなのでしょう。いや、そうでは
ありません。その青年と逢つた時から、どうも私という人間は、何かに魅せられ、何か
に憑かれ、何かにまどわされ、何かに引きずり廻わされ、——古い形容詞を使つて云うと、
悪魔の手によつて引きずり廻わされていたと、そう云わなければならぬようです。

「それより」

と青年が云いました。「ご迷惑で無かつたら私と一緒に、しばらくでよろしうございま
すから、町を歩いていただき度いのです。そうして私の煩悶に就いて、是非とも聞いてい
ただき度いのです」

「よろしい」

と私はすぐに承知して、英租界の方へ歩き出しました。

英租界はご承知とは思いますが、租界の中で一番立派で、東西に通じている大馬路には、
北京路、南京路、九江路、漢口路、福州路、広東路などの素晴らしく

壮麗な路があり、南北に通じている路筋には、四川路だの河南路だの、福建路だの、浙江路だの、広西路だのというような、いろいろの路があるのです。

宛無しに私達は歩き廻りました。

そうです、全く宛無しだったのです。いや私から云わせると「夢のように歩き廻わって」いたのです。こんな変なことって曾てありません。だから悪魔のまどわしの手に、引きずり廻わされたというのですが。だってそうではありませんか、私という人間は職業がら、英租界などは隅から隅まで、掌上の物を探ぐるように、知悉していなければ不可なので、又事実それでもあるのです。即ち知り切って居るのです。それなのにどうでしょう、その日に限って、そうですその日の散歩に限って——その青年との散歩の日に限って、何の路をどんなように歩いたか、少しも覚えていないのです。

濃霧の中をさまよった私！　こう形容でもしますかなあ。

「先生！」

と全く突然でしたが、南京路八〇号——今も云った通り歩いた道筋に就いては、正確の所は覚えていませんが、おおよそその辺へ来た時でした、青年が云ったぢやありませんか、「先生」と、そうです、こう私へ！

で、私は吃驚^{びっく}りして、青年の顔を眺めました。

「お父さん！」

と今度はどうでしょう、そう私に云ったじやありませんか、

「それで無ければ哲学者の貴郎！ 私の煩悶を解決して下さい！」

私は併し思いました。（そうだ俺は一面に於て、先生と云われてよい人間だ、哲学者と云われてもよい人間だ、俺の職業はそういうものを、一切兼ねていなければならず、又兼ねてもいるのだからな。……お父さん？ さあ、これだけは困まる。年齢^{とし}から云つても精々のところ、俺は青年より十歳^{とお}より以上、年上であろうとは思われないのだからな。……しかし然^そうだ、青年の煩悶を、旨^{うま}く解決してやったら、慈父のような人間だと云われてもよからう）

で、私は青年へ云つてやりました。

「君、兎^とに角^{かく}話して見たまえ」

六

「私の名は細川繁と云います」

その青年はそう云いました。

「私には恋人があるのです」繁青年は云いつづけました。「それは日本のお嬢さんなので
す」

「この上海にいるのですか？」

「そうです、上海にいるのです。……どんなに私がお嬢さんを——お嬢さんの名は初
枝と云います。ええ然うです、しがらみ柵初枝と。どんなに私はその初枝さんを、愛して愛して愛
していることか！ 云う必要も無い程です。……ところが私はそのお嬢さんを、どうして
も殺さなければならぬような……」

「おい待ちたまえ、何を云うのだ」

「いえ私はどうあろうとも、そのお嬢さんの命を取る！ どうしても取らなければならぬ
ような、そんな境遇になつて居るのです」

「……………」

「私は大変悲しいのです」

「……………」

「一体、どうしたら可よいでしょう」

「……………」

「お父さん！ 先生！ 教えて下さい！」

「……………」

私は率直に云いますが、全くこの時は参つて了いました。

（とんだ狂きちがい人にぶつかったものだ！）

こう思つて参つたのです。

でも私は云つてやりました。

「そんなつまらないこと止めたまえ！」

「絶対に止めることは出来ないのです」

「そんな馬鹿なことあるものか！ 恋人の命を取るなんて！」

「絶対にそれが出来ないのです」

「何故だろう。云つて見たまえ」

「命令されているのですから」

「命令？ 誰に？ 云つて見たまえ！」

「或る恐ろしい権力者から！」

「誰だ？ 其奴そいつは？ その悪党は？」

「それは一言も云われません」

「云えば云えるさ、云つて見たまえ！」

「云つたら私の方が殺されます。……この支那の国に居る限りは」

「……………」

私はそこで考えました。

そうして或事に思い至りました。

「じゃア青幫チンハンか紅幫コウハンか、白幫ハクハンか黒幫コクハンの連中だな」

「……………」

「おい、そうだろう、云つたがいい」

「……………」

繁青年は云いませんでした。

だから——云わないから——思いました。

(可哀そうに、どうやらこの男は、青幫、紅幫、白幫、黒幫そのどれかの連中の、ひどい

圧迫を受けているらしい」と。

そのため私は奮起しました。

(よしこの青年の味方になつてやろう)と。

(あいつらをこの際やつつけてやろう——俺の使命と一致するのだから——蒋介石め！

その一統め！ 南京政府め！ 顛え上がるなよ！)と。

で、私は云つてやりました。

「信じたまえ、ね、僕を！ そうして一切を話したまえ！」

——でも矢つ張り駄目でした。

何んと驚くじやアありませんか、繁青年は泣いているのです。

私は叱るように云つてやりました。

「男じやア無いか！ 何を泣くんだ！ ね、云いたまえ、敵は誰だ！」と。

すると青年は云いました。

「敵は、先生、青幫なのです」

「そうだろうそうだと思つたよ」

青幫とは一体何んだらう？ こう貴郎は思うでしょうね。

青幫のことをお話しましょう。

いい文献が此処にあります。

私がお話するよりも、これを讀よんた方が解りましょう。

お聞きなさい、讀よみますから。

七

青幫

支那社会の中産階級以下に於て、最も甚だしい害毒を流しつつある二大痼疾こしつがある。それは一を青幫といい、他を紅幫という。青幫は中産階級中の無頼漢的性質を帯びた不良分子即ち質屋の親方とか買弁ばいべんとか。或は運送問屋あるい、苦力クリ及車夫の取締、料理屋、女郎屋の親分などにより組織せられたもので、——行動の如きも極めて巧妙である。紅幫とは、強盜、無頼漢等にて成り、その仕事も直情徑行的すこぶに頗る荒つぽくやつつける方で、青幫には

一度この紅幫の仲間に入つて実務でウンと腕つ節を叩き上げたものがその大多数を占めて居る。即ち紅幫は青幫へ進む一階段ともなつて居る。だから数の如きも紅は青コーチンより大分多い。総て支那社会に起る暗殺、掠奪、ピス強盜ごうとうの行為は、殆んど皆此等青紅幫の手に由らざるものなく、近頃市上で時々起る錢莊せんそう荒しのピス強盜の如きも大部分は彼等の荒行である。この青紅幫の組織内容はまことに整然たるものであつて、團結力の強いことは驚く計りばか、僚友を救うこと、監督者の命を遵奉すること、一致動作すること等も目覚ましい位に厳しく行われている。尤もこの徒党は暗殺や強盜するのみが目的ではなく、中には相計つて生活に安んじているものもある。一朝生活の不安定、或は横暴を極むる金持ちがあると忽ちたちま正体を現わして、荒つぽい仕事をするようになるので、朝から晩まで、暗殺強盜ばかりしている訳では無論ない。

青幫の等級

青幫の格式等級を定めるのに二十四通りあつて、これは皆字を以て現わすことになつて居る。即ち、

円、明、心、理、大、通、悟、覺、普、門、開、放、万、象、依、歸、羅、祖、真、伝、
 仏、法、玄、妙、

昔はこれに尚十六字も多かつたそうであるが、其後自然にすたつて現在の二十四字となつた。そして一番多いのは「悟」の字「覺」の字に相当する者で、その次に多いのが「大」の字の階級に在る人、その上の「理」の字「心」の字相当者は殆ど寥々として暁天の星である。「大」の字は元より「悟」の字「覺」の字等は青幫から師爺しやとして尊敬される。又昔はやかましかつた入幫方法も今は極く容易たやすく、僅かに一人の紹介者位で入れるようになった。尤も二三年に一度位しか募集しないで、その入幫法もやや昔の面影を保つてゐる所もあるが、その入門者の殆んど全部が一様に不良分子であること等は昔と正反対である。

暗語

幫規に就いて云えば、この幫規の最も重要な目的は幫匪同志ハンピの連絡及結束である。沢山の青幫中或は外埠がいふの同幫と出会した場合、お互たがその暗号の話が合わなかつたらどんな間違まちがいが出来ぬとも限らぬ。そこでこの幫規は非常に重要事視され、入幫者は何を措おいても先

ずこの幫規を習うのである。

茲こゝに顔を知らない同幫匪同志の初対面の挨拶ぶりを書いて見る。先ず甲匪が外埠に行つて茶館さかんに上つたとする。するとこの土地の同幫と馴染なじみになつて置く必要があるので、暗号で同幫に知らせる。即ち茶碗の蓋を仰向けあむむにして茶碗の側に置くとか、或は酒店ならば箸を杯の右側に置くとかしてその外店先に看板を出して置く。するとその土地の幫匪が来て暗語問答をする。

乙「老ろう大だい（初めての幫匪にはこんな尊称を用うる）は門檻もんかんに在りますかい」
すると甲匪は立つて不動の姿勢で答える。

甲「祖爺そやの靈光うろくに沾うるいません」（これは入幫の意）

乙「そのお方（師父を指す）はどなたです」

甲「馬ばが名前な前で、上うが徳とく、下げが坊ぼう」（馬徳坊ばとくぼうというのは上海で有名な青紅幫の匪首である）

右のように名を三つに分わかつて呼ぶことは、幫匪中の子弟が師父に対する敬意だそうである。

乙「貴方の名は何というんですか」

甲「江淮こうわい四幫しぱうです」（幫には皆名がある）

乙「老大は何の字を持っていますか」

甲「頭には二十一世せ脚には二十二世でわたしの身は二十二世です」（二十二字目は通の字に当る）

乙はここで甲の着席を勧めつつ尚なほ尋ねる。

乙「あなたの方では現在どこの碼頭ぼとうを占めていますか」

甲「只今△△碼頭です」

乙は尚暗号のことなどを尋ねるが、それが一通り終ると今度は甲が乙に対し同じようなことを尋ねる。そして乙の方が甲より上の位であった時は、甲は座を離れてきくきゆう鞠躬の礼をする。と乙はこれを扶たすけ起し着座を命ずるが、やっとしてから甲は席に返る。等級の相違に由る礼儀の差別は中々やかましい。

甲よりも兄貴分だと判った乙は、その茶代は勿論、それから旅館に連れて行って一切の費用も出してやるし、又土地の者をそこに三日間招待してその費用も乙が負担せねばならぬ。三日過ぎたら大抵その縄張りを出て行くのであるが、若もしもっと永くそこに留まろうとすれば、それ以後の費用は勿論甲の自弁である。

その力

幫勢最も盛んな時は、上は役人より下は游民に至るまで、あらゆる階級の人々を吸集し、清末頃からは女入幫者も沢山あるようになった。蓋し入幫して居れば幫勢を駆って自分を社会的安全の地位に置くことが出来るからである。今左に入幫人物に就て少し書いて見よう。

青幫に役人が入るとするのは一寸嘘のように聞えるが本当のことである。というのは青幫も今でこそ匪賊になつてしまつたが、初めて起した時は清朝を護るといふ目的で、強盜邪淫等を戒め、仁義礼智信を奨励したものである。だから役人連中も続々入幫して来た。尤もその頃は無頼漢の入幫は許さなかつた。所が咸同年間になつて青幫は非常に貧乏になり生計が苦しくなつたから、幫人はこの幫勢を以て自然悪い方向へ向けるに至つたが、已に入幫している役人は脱幫するどころか、それとぐるになつて、色々悪事を働くようになった。一体、支那の役人は上下を通じ自分の懐を肥やす事にのみ腐心し、儲けることなら少し位の悪事は何とも思つていないから、幫匪と通じて財物を掠めたのも寧ろ当り前の

話であろう。

清末某省某州附近の十余県には幫匪の出没最も劇しく中にも某県の十八段という地方四五里四方は全く匪の棲家すみかとなり、一万以上の匪がここを根城として地方へ出稼したもので、子供も女もすべて幫匪となつてしまつた。その頭目は顧三五子と言つてその部下の主なる者二三千人は各村各莊各郷里に分在してその配備嚴密を極めた。そして各所には数十或は数百の匪が固まつて居住し住居の四周には、厚さ五六尺高さ二丈余の土城を築き、四方四個所の門の上には樓を建て幫を置いて絶えず見張人が番をしている。男女の各匪は暇の時は百姓や紡績などしているが、一度命令一下すれば直ただちに匪となる。こんな団体が十八あつたからその地方を十八段と呼ぶに至つたので、各段には小銃なども用意し、盛んに掠奪をやつたから、金持ちの良民はだんだんよそに引越してしまつていつしかその附近一帯が幫の勢力範圍となつた。

幫匪の勢力が日に日に強大になつてゆくので、時の巡撫は統領にこれが討伐を密命した。統領は約一千の兵を率いてその地方に出かけたが、何ぞ知らんこの統領も亦幫匪だつたので、頭目顧三五子と会見の上これから先の發展擴張を相談し、折角せっかくの討伐が却つて虎に翼を添えたような結果になつてしまつた。そこで統領と顧三五子との領域を定め、顧この匪

等はそれから又遠くの地方にその手足を伸ばした。この幫には、一ヶ月以内に同じ県を二度犯さないという内規があるので、従つてその荒し廻る地方がだんだんと拡がって行つた。

その後各地方からの訴えに由り省の役人が探偵を出して十八段地方に入り込ませてみたが、男は田野に耕し女は糸を紡ぎ、子供は水牛に乗つて笛を吹き、老人は家うちに閑居して羨ましい程の太平の有様である。役人は案に相違し、こんな平和な村に盗匪はいる筈はないと言つて引き上げたが、これは全く幫匪にばかされたのである。匪と言えば統一も規則もない無頼漢の寄り集まりであるのが普通であるが、青幫の内部がいかに秩序整然たるかは一寸右のような工合である。彼等が掠奪しに出かける時は、暗夜にこっそり指定の場所に集まり、そして帰る時も各自獲物を分け、三々五々、買物でもして帰るように見せかけて来るので滅多にそれと気づく者はいない。匪の隣に住んで居ても分らない位である。だから、どれが良民でどれが幫匪であるかは匪より外は知る者がない。只この十八段地方では例の土城が問題となり、而も中しかに大砲や鉄砲を収めてあることも分つたので、役人はこれに就き調査を始めた所、村人の答弁が振つてゐる。曰く、自分達がこの土城を築かなかつた以前は、盗匪が出没して大分掠奪を被つたものであるが、茲に砲銃を備えるようになつてからそいつ等が一切寄りつかなくなつた。そこで村は御覽の通り太平無事である云々。

役人は成程なるほどと感心して帰り、討伐は全然無効に帰したという話がある。地方軍官が幫と通じて悪事を働くこと及び幫内のいかに統一のついて居るかはこれを見ても分る。

軟相と硬相

青幫中で一番多いのは游民である。一定の職業なくぶらぶらしている連中で、よく言えば浪人悪く言えば無頼漢、これが幫勢の中心をなしていると云つてもよい位である。そして青幫の中には軟相なんそうと硬相こうそうとの二大別があつて、軟相は更に架相かそうと吃相きつそうとに分れて居る。この軟相というのは比較的罪の軽いもので、逮捕せられても死罪は免れる。これを文差使んさしとも称しているが、その中の主なることだけを説明しよう。

架相というのは、財産のありそうな奴を見立てて自分の幫に引つ張り込む一種の誘拐者である。だから金のない若もしくは金の融通の利かないような者に対しては手をつけない。そうして一旦これを引つ張り込むとその者を連れて外ほかの都市に遊びにゆく、するとその青幫等が思い切つてウンと御馳走をして金銭なんか惜おしくないと言つた風な態度を示す。そして帰る時には数百元を送りものとして進上する。又その者が外出する時には乾兒こぶんみたい

な奴を五六人もつけてやる。外出して帰って来れば乾児等がソレお茶だとか何だとか騒いで歓待の限りを尽す。本人もいい気になつて親分になつた積りつもでいる。そしてだんだん日数が経つ中に、その道の空気にも大分染り、匪首の威勢のいいこと、幅のきく事等がツクツク羨やましくなつて、自分も一つその大頭株になつて見たいと大變な欲望を起し、そして見得を張り又人々から煽おだてられたり、せられたいため札ピラを切る。金がなくなると家を売り土地を譲つて財産がなくなるまで目が覚めない。又目が覚めて居つても、外の都市ほかの匪首が遊びに来れば、自分が行つた時大變御馳走になつてゐる義理合上黙つてはいられない。矢張り幾百元か捨てねばならぬ。こんな工合ぐあいでいつしか立派に幫中の人となつてしまふのである。

幫首は随分金の要るものでその代り又儲けもするが、その主なる入費は外都市の幫匪との交際である。遊びに来るとか又その地を過ぎる幫首に対しては必ず御馳走せねばならない。而し手許が不如意の時は上海あたりの大きな幫匪から借りてでも彼等仲間の儀礼を尽さねばノケ者にせられてしまふ。こんな風に彼等は沢山の費用を要する場合がよくあるので、どこか一つ大きな碼頭を管領して置かないとその方の自由がきかぬ。又碼頭を占領して置けば旅行などの時にも頗る便利だ。而しそういう大きな幫匪の所にはいつも居候が沢

山ゴロゴロしているもので、前に上海で有名な匪首であった馬徳坊の内などでは、その居候に食わせる飯を毎日三斗も焚いていたそうである。ここらは一寸日本の親分乾児の關係に似ている。金が要るから従つて金が欲しい、金の為めならどんな事でもする、人でも殺す、平気で殺して報酬を受けるが、流石さすがに人殺しの報酬は高い。どんなに少くとも百元よりやすいはなく、高きは五六千元に至るのも珍しくない。上海あたりの殺人は多く此等幫匪の手に行われている。

幫匪の仲間では子供や女の事を石頭せきとう條子じょうしとか貨色かしよくとか言っているが、この貨色なども亦またよく彼等匪徒の手に誘拐せられ、そしてよそに売り飛ばされる。又他の誘拐者がこの匪徒に貨色の送附方を頼んで来るのもある。何れにしても二十元から数百元位の収入はある。上海から、奉天、威海衛へ送り出す貨色は年々千名を下らぬそうである。

架相の中にも色々あるが、以上の外に軟把なんばと言つて、博奕専門の匪もある。九郎中、田一亭、童徳宝等の如きは上海に於ける有名なる軟把であつた。博奕もまた青幫の収入中の重要なもののである。

青幫の金儲けの中で碼頭廻りまわというのがある。一寸仕事もなく暇ばかりで遊ぶのにも困るといふ時分に、揚子江流域の碼頭遊歴と出かける。氣ばらし旁々かたがたむおん無音むおん払いかねを兼て金

儲けと一挙三得のうまい旅行だ。手近の碼頭から次々にと上流の方へ足を伸ばして行く。各碼頭では、上海の親分が来たというもんで、宿屋代日用品の供給は勿論、愈々その碼頭を離れる時には、餞別として少なきは三五元、多きは百数十元を進物するから、一巡して上海へ帰る時には千余元の金が唸つている。そして餞別の金高はその碼頭の匪徒の格式を計るバロメーターとなるのであるから各匪は挙つて出来るだけ沢山進物をする。従つてこつちの収入も増すという訳だ。茲に一例を挙げて見ると、顧海雲という二流所の匪首が松江に行った時その匪首は顧の為め博奕を開き、そのテラ銭以外に百余元を送つたそうである。一寸行つてもそれ位だ。尤も各碼頭の匪からの贈金や待遇は、お客さんたる匪首の貫禄如何によつて変る。以上の四事は架相に属する仕事である。

次に游民中の吃相に就て話すと、これ又四種に分ける事が出来る。その一の開門口と云うのは女で金儲けすることだ。よそから売りに来た女を買つてその中の上玉は長三とか、幺二とか、即ち芸妓にするが、悪玉は淫売とする。女の代価は百数十元より高いのはなく、大抵百元が普通、悪いのになると二三十元という安いものもある。そして女に就て彼等が一番注意するのは、顔の外に、処女であるか否かである。もし其女が大蠟燭（バージン）を通人仲間で（こういう）であれば、どんな醜婦でも先ず五十元以上で売れ、洗礼後のものなら

ば値は半減する。かくて売られた女が淫売を強いられ、闇い社会にうようよ生きている態は四馬路や師孝徳路あたりで見らるる通りである。多きは十数人、少きは三四人の売女を一軒に置き、老鴉門頭等がこれを監督して夜昼の分ちなく商売を勧める。白昼客をとるのを打炮といひ、其家に入つて打炮しない客を跳老虫という。この跳老虫でも決してタダでは返さない。之等娼女が働く金は多い時は一日十数元にも上る。

開香堂というのは、堂を開いて匪徒を募集することであつて、顔のよく売れた幫匪の開堂には一時に百名乃至二百名を収容し、新入匪は普通拝師金として十元開堂費六元合計十六元を収むる。又小匪首などの入堂するに際しては多くの金の外に酒食などを供してお目見得をする。自分の顔を立てるためだからそれは是非もない散財だ。大親分になるところして一度開堂する毎に少くも千元の収入を見る。馬徳坊の如き顔の広い親分の開堂する時は、外省の游民が船車でやつて来て馬師を拝しその乾兒実に万人余に及んだそうである。

吃相の中の収陋規というのは何か不正な仕事をしようとする際に幫匪の親分が各方面へ夫々手付けをやつて置くことで、探偵等の如きも幫匪に対しては滅多に手出しが出来ないのである。

差勇

以上の三事を架相と称する。青幫の組織する人物に就ては已に役人と游民とに就て記したが尚茲に差勇と称する者が居る。差勇は兵勇差役で、兵隊と人夫とである。幫匪が大挙して一隊を作り或は泥棒し或は喧嘩して負傷兵が出来たりなどすれば、差役がこれ運ぶ。その他色々内通やら人夫的の働きやらをする。前清光緒二十九年のこと、江蘇に望平橋ぼうへいきよと称する一鎮があつた。東西二支里計りの街であつたが、相当に繁昌し、殊に鎮の北市では博奕が一年中開かれていて出入する者昼夜絶えなかつた。附近に停泊している百余艘の船中にも同じように博奕が開かれ、そして船中には新式の小銃を備えてあつた。この賭場が開かれて以来数十支里の田舎から賭客が船や車で出かけて来る者引きも切らず、従つて鎮は一層の繁昌を示した。船の者等は少しもゆすりがましい事をしないで、鎮の店へ買物するのにも相当の値段できちんきちん取引するので、街の人の喜びはなかつた。そうして其後三年ばかり経つ間に財産をすつた者が続出したので、鎮の某は賭博の弊風を一掃しようとしてこれをそつと某大令たいれいに告げた。そこで大令は城守と共に緑營兵士数十名を

引率し該鎮に来て見た所、賭場は閉鎖され、船はどこに行つたか影も形もない。大令等は差役に命じその賭場を焼かしめて引き上げたが、引き上げるとすぐに又元通りの博奕が出来た。兵が来ると何時の間にか消えて無くなり、兵が帰ると又すぐ開かれるという工合で、大令も後では奔命に疲れてしまった。それもその筈で、この軍隊は該匪と内通し、自分達が討伐に向うに先立つてその旨を通知し、予め立ち除かして置くので、捕まる者が一人もない。所が始め訴え出た某はその間の情実を察知したので上官に密告した。そこで或日未明に一隊が突然襲来して、匪の夢を破り、多少戦うて終に十余名を捕虜としたが他は逃げ去ってしまった。

八

青幫チンハンというのはこういうものなのです。そうしてその青幫の中には、日本人も加入しているのです。

そうして一旦加入した者は、どんなことがあろうと脱けることは出来ず、又、命令に背くことは出来ず、もしもそれに違反したが最後、自分ばかりか一家一族が、根絶やしにさ

れて了うのです。

そういう青幫に繁青年が、関係しているというのですから、恐ろしいことと言わなければならず、私も昂奮した訳でした。

「繁君」

と私は云いました。

「事情を詳しく話すがいい。ね、詳しく話したまえ」
すると青年は云いました。

「私、貴郎あなたにお願いいたします。娘の家うちへ行つて下さい。初枝さんの家へ。私の恋人の家へ」

「場合によつては行つてもいいが、僕が行つてどうするんだね」

「私と初枝さんを助けて下さい。お願いでございます。お願いでございます」

「だが、果たして、僕のような者に」

「先生、貴郎には何んでも出来ません。私には解っているのです！」

（不思議だな、どうしたんだらう？ ……俺の素性を知っているのかしら？）

私は変に思いました。

しかし率直に云つて了いましょう。

この青年はよく見抜きました。

私という人間をよく見抜きました。

そうです、青幫コウハンや紅幫コウハンを、向うへ廻わして戦い得る者は、私以外には無いのですから。

そうして私が旅行をするのも、そうです先刻も申しました通り、私は明日にも上海を立つて、呉淞ウースンから沙市シャシの方へ旅行するのですが、その旅行する目的も、その青幫と紅幫とに、断然関係があるのです。

両リャン幫バンの頭目を探し出す！

と云うのが目的かもしれませんが。

ハツハツハツ、が、併しかし、これはハツキリとは申しますまいよ。

「よろしい」私は云つてやりました。

繁青年へ云つてやりました。

「行こう、君の愛人の家へ、そうして何とかしてあげよう」

「先生、此処です。この家なのです」

オヤオヤと驚いて了いました。

行くも行かないも無かったです。繁青年は計画的に、いつの間にか私をその家へ、彼の恋人初枝さんの家へ、私を連れて来たのですからね。

其処は××街の八八番地の、随分閑静の住宅地でした。

その一面に洋館づくりの、宏壯の屋敷がありました、それが初枝さんの屋敷なのでした。

棟が幾個にも別れていて、それらの幾個かの棟を巡って、石垣が嚴重につくられてあり、植込が繁く茂っていました。

私達は玄関へかかりました。

そうして案内を乞いました。

すぐに小間使が出て来ましたので、繁青年が何か云うだろう、こう思つて其方を見ましたところ、何んと驚くじやありませんか、繁青年はいないのです。

つまり私を置いてけぼりにして、何処かへ立ち去つて了つたのです。

私は瞬間途方にくれました。

しかし私には繁青年の意図が、何んとなく諒解されたので、躊躇せず云つてやりました。

「お嬢様おいででございましょうか」

「はい、おいででございませうが。……」

「細川繁君の友人なのですが、細川君のことに就きまして、ちよつとお嬢様にお眼にかかりたいので……松城昌三という者です」

「ちよつとお待ちを」

と云いすて、小間使は奥へ引き込みましたが、すぐに出て来て云いました。

「どうぞお通り下さいますよう」

——そこで私は通りました。

案内されたのは玄関の横の、立派な応接間でありました。

一方に玉突の台があり、一方にグランドピアノがあつて、素晴らしく広い応接間で、客間めいたところさえありました。

ソファアーへ倚つて待ちながら、初枝嬢が出て来たなら何んと云おうか、とそれに就いて考えました。

（そうだ、真先に試みてみよう）

私はそんなように決心しました。

運ばれて来た紅茶を喫み喫み、しばらく待つて居りました。

と、軽い足音がし、ドアを開いて二十一二の、気高いように美しく、そうして大相無邪気な顔をした、洋装のお嬢さんが這入つて来ました。

初枝嬢だったのでございますね。

私は直ぐに立ち上がり、両方の手の四本の指を——つまり母指と人差指とを、丸くして二つの輪をつくり、その輪を左右の眼へあてて、輪の中から初枝嬢を眺めてやりました。

と、初枝嬢はギョツとしたように、胸を背後へ反らしましたが、でも殆ど反射運動のように、自分も同じ形をし、輪の中から私を眺め返えました。

が、すぐにしまったと云うように、その手をダラリ、と下げて了うと、くず折れるように肘掛椅子の中へ体を埋めて了いました。

「ご心配には及びません。私は幫志では無いのですから。……勿論お嬢様も然うではないでしょうな。……私にはよく解つて居りますよ。……そうして最早この問題には、触れないことにいたしましたよう」

私はこう云つて腰かけました。

九

そう私に云われたので、初枝嬢はホツとしたようでした。

しかし黙つて俯向うつむいたまま、顔を赧あからめては居りました。

と、不意に顔を上げ、私の顔を正視しました。

その顔を私も見詰めましたが、

なるほど
(成程)

と思わざるを得ませんでした。

徴候がすっかり出ているからです。

——物を見てはいるが見えてはいない眼付！——。

そういう眼付であつたからです。

(こんな可愛らしいお嬢さんを、青幫の奴等め、ひどいことをし居る！)

私は義憤を感じると共に、初枝嬢に同情してしまいました。

「お嬢さん」

と其処で話しかけました。

「お体のお加減がお悪いのでしようね」

「はい。……いいえ。……でも矢^や張^ばり」

「何時^{いつ}頃お悪くなりますかな？」

「……………」

「深夜でしような。……二時か三時頃。……」

「……………」

「併しお嬢さんご自身には、それがお解りになりますまい。却^{かえ}つてお嬢様は眼を覚ました時に——朝、床から起きられた時に、体の悪さをお感じなさるでしょう」

「はい、そうなのでございますの。……特にこの頃はそうなんですの。……でも、大変失礼ですけれど、どうして貴郎にはそんなことを。……あの、お医者様でいらつしやいますて」

初枝嬢はそう云つて、不思議そうに私を見ました。

「或る場合には医者にもなります。……或る場合には心理学者にも……」

「でも繁さんのお友達には……」

「いや、私と細川君とは、つい最近の交際なので、おそらくお嬢様には私の噂を、これ迄^{まで}

「一度も細川君の口から、お聞きになつたことはありませんまいよ」

「……………」

「それは然うと貴女のお父様が、行衛ゆくえ不明になられたのは、恰ちやうど度今から五年先の、八月二十日のことでしたな」

「まあ、どうしてそんな事まで…………」

「総領のお姉様が変死なされたのは、恰度今から二年ぜん前の八月二十日のことでしたな」

「どうしてご存知なのでございましょう。……………そうして貴郎はどういう方です？」

「二番目のお姉様が変死なされたのは、恰度今から一年前の、八月二十日のことでしたな」

「云つて下さい、貴郎つて人、どういふお方なのでいますか！」

「で、今度はお嬢様の番だ」

「お母様！ お母様！ 早く来て下さい！」

「お嬢さん、騒いじやア不可いけません。何んでも無いことじやアありませんか。貴女のお屋敷に門アドレス礼がある。柵鉄也と書いてある。多少上海の事情通なら、柵家に起こつた今云つたような事件は、誰でも知っている筈です。で、私も知っているだけです。……………そうして現在お嬢様が、殺されかかっているというそのことは、たった今貴女の愛人にあたる、細

川君から聞いたので、これだって間違いありません」

さて此処で柵家に就いての、怪奇の出来事をお話ししましょう。

十

柵鉄也が上海へ来たのは、十八歳の時だったということで、通訳として来たのだということですが。

或外人の通訳として。

その後いろいろの商館や、公司や洋行に勤務したそうで随分苦勞はしたものだそうです。苦勞した金は儲からず、又、位置なども出来なかつたそうで、三十歳頃迄はこれといって、社会の表面へも現われず何んでも無い人間だったということです。

ところが夫^それが四十歳頃からメキメキと金を儲け出し、社会的位置もよくなって来て、××会の会長だの△△倶楽部の副総裁だのと、そんなようなものにさえなつて了い、上海在留の日本紳士中での、幅利きの一人となつたそうです。

何^どうして、何処で、そう儲けたのか。

これが人々を疑わせたそうです。

しかし所が上海なので、すなわ即ち世界の縮図であり、道德無しと云われている、東洋きつての魔都なので、何うして何処で儲けたところで、そいつを根掘り葉掘りして尋ねたり探ったり問題にしたりなんかはまあ誰もしなかったのです。

それに鉄也という人間が、社交上手で愛嬌があり、聡明でもあり義侠的でもあり、要するに立派な紳士だったので、尊敬こそすれ悪あく口こうなどは、誰もが云わなかったということです。

その夫人が鉄也と同じく、社交上手で賢明だったので——ただ但しいくらかブルジョア趣味的で、高慢で派手好きで美人だったので、婦人達には鉄也のように、評判よくはありませんでしたが、その代わり男の間では、大分評判が良かったそうです。

三人の娘がありました。

鉄也も好男子、夫人も美人、ですから三人の娘達が、美しかったのは云う迄もなく、これが又世間の若い男達の、柵家に好意と興味とを寄せる、大きな原因となったそうです。

で、柵家へは毎日毎夜、おびただしい人が集まって、賑にぎやかさを極めたということです。

長女の名は浦路うらじさん、次女の名は潮子しほこさん、そうして末の娘さんは、さつきお話しした

初枝さんなのです。

夫人の名は絹子というのです。

ところが今から五年前に、突然鉄也氏が行衛不明となり、今に消息が知れないのです。つまり死んだのか生きているのか、それが今に知れないのです。

当時は世間でも随分騒ぎ、警察方面でも可成り熱心に、そうして勿論同情を以って、手を尽くして八方搜索しましたが、行衛を知ることが出来なかつたそうです。

ところがその中に警察方面では、鉄也氏搜索を糸でも切るように、フツツリと切つてしまいました。

鉄也氏の居間の壁の一所に、

りつせいでんらいかんちゆうあり 立誓伝来有奸忠。しかいけいていっばんおなじ 四海兄弟一般同。

ちゆうしんぎきこううい 忠心義氣公候位。かんしんはんこつとうかおわる 好臣反骨刀下終。

このように書いた小さい紙が、ピンで止められていたということ、夫人によって発見され、警察の耳へ這入ったからで、

さては青幫が関係しているのだなど、そう知つたからだということ、

(青幫のやつた所業なら、どう探がそうと解るものではない)

——で、断念をしたんですね。

ところが災いはこればかりで無く、長女の浦路さんが二年前の、八月二十日に変死したのです。つまり黄浦河ホアンプーの水の上に、死体となつて浮かんでいたんです。ところが更に去年の八月、それも二十日という同じ日に、これも黄浦河の水の上に、死体となつて浮かんでいたんです。そうです、次女の潮子さんが。鉄也氏が行衛不明になったのも、矢張り八月二十日という日で、この日附は全く柵家にとり、呪くう可べき日でなければなりません。そうして今度は末女の初枝さんが、愛人の細川繁青年によって、殺されなければならぬ。いような、悪運命に遭遇しているのです。

十一

尚なお私は十五分ばかり、初枝嬢と話をしていました。

と、ドアをあけて一人の婦人が、部屋の中へ這入つて参りました。

それは絹子夫人でした。

私の方では知っていました。夫人の方では知らなかった。で、咎とがめるように云いまし

た。

「おや初枝、お客様なのかい。……失礼ですけれど何ういうお方かね」

初枝嬢が何んにも云わない先に、私から立ち上がって云いました。

「細川君の友人でございまして、松城昌三と申す者です。今後は何卒^{なにとぞ}お心安く……」

「細川さんのご友人、おや左様でございましたか」

夫人は何んとなく疑わしそうに、私をジロジロ見廻わしました。

有名な美貌の持主でしたが、一つは年、もう一つは、重なった不幸に打ちひしがれ、すっかり^{おもかげ}悌を変えていました。

それでも体格は立派であり、よく洋装が調和^{うつつ}って見えました。

性質も昔とはすっかり異^{ちが}い、かたくなとなり疑い深かくなり、愚痴つぽくなり、すぐ泣くようになったと、世間一般の噂でしたが、しばらく話をしている中に、そういう性質も見えてとれました。

しかし私はどんな婦人であろうと、話している中に、捕虜にしてしい、信用させて了う一種の伎倆を——笑って下されては困まります、それは職業から来ているのですから——そういう伎倆を持っていましたので、この夫人も間もなく私という人間を、信用するよう

になりました。

初枝嬢が中座した隙に、私は夫人へ云いました。

「奥様、お家にとりまして、厭いやな日が近づいて参りましたな」

「……………」

すると夫人は撲なぐられたかのように、ギョツとしたような顔をしましたが、すぐすすり泣をはじめました。

(無理ではないな) と思いながら、私は夫人に云いました。

「八月二十日という厭いやな日が、つい間近かに迫りました。…………お嬢さんの初枝さんのお身の上に、ご用心なさらなければなりませんまい」

「はい、そうなのでございます。…………それで妾わたしはまあ何んなに、この日頃心配して居りますことか! ……どうしたらよいのでございましょう!」

「いや、ご心配なさいますな、大概私にお嬢様のお命を、取り止めることが出来そうですから」

「そうして戴いたきましたらまあ妾は、どんなに嬉うれしゆうございましょう。…………でも、本当に、貴郎のお力で?」

「まず大概は大丈夫でしょう。……そこで一二お訊ねいたしますが、浦路さんと潮子さんが変死なさいました時、ああいう変死をなされる直前に、何か変わった出来事が——つまり二人のお嬢さんのご様子に、変わったところはございませんでしたか？」

「さあ」

と夫人は考え込みました。

「そういえば娘達は変死の前ごろから、夢でも見ているような茫然とした様子を……」

「で、如何いです初枝さんも、そうです初枝さんの昨今も、そうなつては居りませんか？」

「はい、そうなのでございます。矢張り同じように、そんな様子に……ですから妾は気が気でなく……」

「お二人ながら同じ黄浦河で、同じように溺死なされたという、この点に就いて何かお考えが……」

「それもその当時から変なことだと、妾は思つて居りましたが……」

「お二人ながら何者かに誘惑されて、黄浦河の方へ出て行かれ、何かの事情で河へ投ぜられたと、こんなようにお思いになりませんか？」

「誘惑されてと申しますと？」

「誘惑には二通あるようですね。……意識的の誘惑と無意識の誘惑と」

「……………」

「で、二人のお嬢さんの場合は、後者にあたると思われるのです」

「無意識的の誘惑だと、こう仰おっしゃ有るのでございますね」

十二

「そうです」

と私は云いました。

「そうです、無意識誘惑なのです。云い換えると不可抗的誘惑なのです。……ところで現在初枝さんが、それにかかっているのです」

「まあ」

と夫人は顔色を変えました。

「どうしたらよろしゅうございましょう。……それに無意識、不可抗的って、どんな誘惑なのでございましょう？」

「精神科学、心理学、そんなものに属しているものです。が、私にはその誘惑も、大概破壊することが出来そうですから、ご心配せずにお任せ下さい」

「どうぞお願いいたします」

「召使も大勢でございましょうね。お屋敷が大分手広いようですから」

「はい、女中が三人に、支那ボーイが一人、爺やが一人、五人の召使を使つて居ります」それから私は尚一時間ほど、夫人を相手に話してから、柵家へ別れを告げました。

私の住居は日本人町の^{すまい}呉^{まち}淞路^{ウースンルー}の二十号にあつて、日本商人の山崎という人の、別館一棟を借りていたので——それは洋館でありました——誰にも^{わずら}累いされることなしに、研究することが出来るのでした。

自分の部屋へ帰つて来て、ソファアへ腰かけて煙草を喫つたものです。

問題は今のところ簡単であり、探偵小説にあるような、複雑性などは無いのですから、考える必要も無かつた訳です。

(要するに度胸の問題さ)

そんなように私は思いました。

(危険性はうんとあるが)

それは相手が青幫なのですから、命がけと云わざるを得ませんでした。その夜私は十二時頃寝ました。

何かの気配を感じたのでしよう、私はフツと眼をさました。すぐに電気をつけて見ました。

卓の上に一枚の紙があり、その紙に字が書いてありました。

「柵家の事件より手を引かざることは、

貴下の生命を失うことなり。

青短剣」

斯こういう意味の文章でした。

(早速彼奴等やり出したな)

私はそう思つて苦笑しました。

見れば裏庭に面している窓の、一枚の硝子が切り取られています。

青幫の一人が忍び込んで来て、そんなことをしてそんな紙を、卓の上へのつけて行った

のでしょう。

（ピストルで俺を殺そうとしたら、すぐにも俺は殺されたろうな。硝子を切り取った窓の穴から、手を差し入れて俺を射^{うっ}たら）

だから危険だと思いました。

朝になった時卓上電話のベルが、けたたましい音を立てました。

受話器を耳へ押えつけると、

「妾絹子でございませうが」

と、絹子夫人の声がありました。

昨日柵家から帰える時、夫人へ私のアドレスと、電話番号とを云って置いたので、それでかけて来たのでしよう。

（何か事件が起こったと見える）

そう思って私はヒヤリとしました。

「何か事件が起こりましたか？」

「初枝が変なものを受け取りましたので」

「何んですか、変なものとは？」

「手紙なのでございますよ」

「手紙？　ははあ、誰からの手紙？」

「差し出し人が解らないのです」

「……………」

「花売娘が持つて来たのです」

「花売娘、こいつは詩的だ」

「まあ、そんなご冗談を。……今朝初枝が寝巻のまま、裏庭を歩いて居りますと、可愛い花売の娘が来て、花を買ってくれと云ったのだそうです。それで初枝が買いましたところ、花束の中に有りましたそうで。手紙があつたのでございます」

十三

「どんなことが書いてありましたかな？」

「申し上げにくいのでございますが……」

「私に関することですか？」

「はい、そうなのでございます」

「では、私には見当がつきます。私という人間を近づけるな、近づけると恐ろしい目に逢うぞと、こんなことが書いてあったのでしよう」

「よくご存知でございますのね。そのとおりなのでございます」

「そこで夫人にお訊ねしますが、いかがです私を追っ払いますか」

「飛んでもない、そんなことを……」

「では結構、それでよろしい」

「でも、妾は恐ろしくて……」

「恐ろしいのは当日だけです」

「……………」

「八月二十日だけが恐ろしいのです」

「……………」

「いずれお訪ねしてお話ししましょう」

そこで電話を切ってしまいました。

それから私は考えました。

自分が柵家へ行つたことと、今度の事件へ踏み込んだことを、幾人の者が知っているだろうか。

(細川繁と絹子夫人と、初枝嬢との三人だけだ)

答えはすぐにこう出ました。

では三人の中の何者かが、青幫の連中へ俺のことを、内通したと解さなければ不可ない。そこで青幫の連中が、柵家と俺とを隔てようとしたのだ。

(いや、もう一人あるらしいぞ)

が、私はそんなことより、繁青年の訪ねて来るのを、心待ちに待つて居りました。

これほどの重大事を頼んだ彼です。私と柵家との会見の様子を、知り度たいと思つて訪ねて来るのは、当然のことでありますからな。

(来たら断乎として訊いてやろう)

そう私は腹をきめていました。

果たしてその日の正午頃、繁青年は訪ねて来ました。

不安と焦燥とにオドオドして、昨日より悲惨みじめに見えました。意志も何も無くなつて了つた。そんな人間に見えました。

(こんな人間には活を入れる意味で、高飛車に出なければ成功しない)

「こう私は思いましたので、

「君、そこへ掛けたまえ。……さて、君に訊ねるが、君の属している青幫の本部、何処にあるのか云つて見給え！」

「こう云つて睨みつけてやりました。」

「……………」

「繁青年は答えませんでした。」

「城内か、それとも四川路シセンルーか!？」

以前にもお話したとおり、私は私の職業柄、青幫に就いては徹底的に、研究をして居りましたので、上海に幾個本部があるか、その本部は何処と何処にあるか、そんなこともおおよそは知っていました。

「繁青年は黙っていました。」

「云えないことはあるまい、云つて見たまえ！」

「城内です、城内の……………」

「それだけでよろしい、城内だけでよろしい。……で、会長は何んていう奴かね」

「知りません、知らないのです！」

繁青年は強く云つて、私の顔を怨めしそうに見ました。

私も無理には訊ねませんでした。

幹部で無ければ本部の会長の、何者であるかを知ることが出来ないという、そういう組織になつて居り、もし又諭え知つていたにしても、それは絶対に云うことが出来ず、云つたが最後云つた人間は、例外なく命を取られて了う。——そういうことになっていることも、私は知つていたからです。

聞く可きことが他にないので、繁青年に云つてやりました。

「昨日僕は初枝さんとも逢い、絹子夫人とも逢つて話した。そうして僕は云つてやった。初枝さんの命は私の力で、大概取り止めてお目にかけて。で、今度は君に云おう。君がどんなに初枝さんの命を、八月二十日に取ろうとしても、僕が決して取らせないと。さあもうよろしい、今日は歸えりたまえ」

十四

その夜私は家を出て、城内へ這入って行きました。

城内というのは云う迄も無く、支那町まちのことでありまして、上海中で物騒な方面では、代表的のところであり、白昼ホールダップが行われたり、人攫ひとさらいや殺人が行われたり、そうして一旦行われるや、容易のことでは犯人が出ないと、そう云われている所です。

夜は商売をしていません。

昼間は殆どほとん狂気じみているほど、騒がしい賑わしいこの一画も、夜はひっそりと静まり返えり、人影など滅多に見ることが出来ず、見れば夫れそは九分九厘まで、悪漢でなければならぬのです。

露路などから突然飛び出して来て、矢庭に短刀でドテツ腹をえぐり、ほんのハシタ金を奪うために、——人間の命を犬や猫より、安くつもっているような、そんな凶悪の人間ばかりが、時たま彷徨さまよっていると思えば、まあ間違ひありません。

有名な湖心亭を右に見て、私は壬王街みわうの方へ歩いて行きました。

その間に三度ばかり人間と逢い、襲われそうになりましたが、まさか私という人間を——それは様子で解りますので——襲うような素人の悪漢あくかんは無く、事も無く壬王街へ行きつきました。

と、此処にこんな城内などに、よもや有ろうとは思われないような、鬱蒼とした森があらまして、その森の中へ踏み入るや、私の姿は忽然として、消えたであろうと思われます。と云うのは誰かが私の後を、こっそり従^つけて来たとして、そういうのでありますし、消えたと神秘的に云ったところで、何も魔法や忍術で、姿を消したというのではなく、これも私の職業から、自然と会得した方法で、木立の蔭へ隠れた迄なのです。

で、耳を澄ましました。

少し離れた森の奥から、囁く声、歩き廻る足音、そんなものが幽^{かすか}に聞え、其処に大勢の人間が、集まっていることを証明しました。

で、私は進んで行きました。

此処で申し上げて置きますが、この時の私の服装は、背広などという洒落^{しや}れたもので無く、苦力^{クリ}の服装をしていたことで、そうして鳥打をまぶかに冠^{かぶ}り、顔をかくすようにしていました。

青幫には日本人も加入して居り、その日本人が苦力姿をして、本部の会合へ出席したのだと、そう思わせるように仕組んだのです。

果たして闇の中に十数人の男が、塊^{かた}まり合つて立っていました。

私が傍へ寄つて行くと、その中の一人が声をかけました。

「来たれるは誰ぞ？」

勿論支那語で云つたのです。

私も支那語で直ぐ答えました。

「汝の兄弟」

「何のために来たれる？」

「公所（本部のこと）の会合に列せんがために来たる」

「劍と頸といずれか堅き？」

「頸堅し」

「幾人か汝と共に来たれる？」

「一人」

「汝、何を以つてか一人来たれる？」

「秘密を保たんがために」

「よし、兄弟、通るがいい」——で、私は先へ進みました。

以上は青幫の問答なので、云う事が判で捺したように、ちゃんときまっています。

云つて見れば日本の博徒仲間で行う、仁義というあれなのです。

で、この仁義が云えなければ、贋物として追つ払われるのです。こうして私は第一の関門を、旨く越して了いました。

第一の関門を越しさえすれば、第二、第三関門は、形式的のものなので、難無く越すことが出来るのです。

第二と第三の関門を、事実私は難無く越して、集会所の入口へ達しました。周囲一丈もありませんか、そんなにも太い杉の木があり、その根が空洞になっていましたが、それが集会所の入口なのです。

私は其処から這入つて行きました。

石の階段が通じていて、それを歩いて下へ行きました。

十五

下にあったのは地下室でした。

地下室で見た光景は、凄いとえば凄いと云われ、滑稽だといえば滑稽だとも云われ

る、そういったようなものでした。

催眠術をかけている所を、冷静に第三者が観察したら、滑稽に見えるじゃありませんか。

が、同じ光景を、感激的にロマンチックに、——いや寧ろミスチックに、眺めたとしたら同じ光景が、凄く見えるに相違ありません。

地下室で私の見たものは、その催眠術の魔法だったのです。

もし魔法をしているその人が、魔王を現わした仮面を冠り、物々しい喇嘛風の胴服を着、印を結んだり解いたりするような、変に技巧的な手附をし、その前に跪坐し平伏し、恐れおののいている被魔法者を、威嚇していたとしたらどうでしょう。

しかも魔法者の前と後に、青い色の焰ほのおや赤い色の焰が、燃え上がっていたとしたら何うでしょう。

その上魔法者の右と左に、数人の覆面をした人間が、妙に威容をつくろって、並んでいたとしたら何うでしょう。

可成り怯おどろかされるじゃありませんか。

私が這入って行った地下室で、認めたところの光景というのが、そう云ったところのも

のでした。

支那の人間という奴は、こういうことを好むものです。

何事をも物々しくし、何事をも神秘化する。（これは道教の悪感化なのですが）そうして何事をも非科学的にする。

そうして彼等は催眠術というものを、ひどく巧妙に使用するのです。

義和団事件を起したところの、彼の拳匪けんぴという奴や、一層有名な長髪賊なども、矢張り催眠術を巧みに使用し、愚夫愚婦を瞞着し煽動したものです。

だから青幫紅幫の徒が、同じように催眠術を使用して、悪事をするのは自然であり、当然であると云うことが出来ます。

併し被施法者が繁青年——細川繁であったのには、私も少し驚かされました。

そうです繁青年が、魔王のような仮面を冠った、青幫の会長の前に跪ひざまずき、嘆願していませんか。

「私にはどうしても今度の役目ばかりは、仕遂げることは出来ません。どうぞ他の誰人どなたかに、お命じなすって下さいますよう」

こう嘆願しているのです。

しかし会長は聞き入れませんでした。

会長は呪文でも称えるかのような口調で、

「お前は役目を果たさなければならぬ。それだのにお前は毎日のように、力を失って行くではないか。……さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々の中に於て、お前は役目を果たさなければならぬ！」

その声は厳めしく、そうして催眠術施法者の型に、そっくり箴^はまった命令的のもので、そうして、従つて邪教の教主が、信者に対してご託宣をする時、きまつて使う語調でもありました。

と、果たして繁青年は、その語調その態度に、すっかり圧伏されて了い、意志を喪失して了いました。

彼は云つたじやありませんか。

「そうです、私は、さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々の中で、役目を果たさなければなりません」と。

(もう可^い)

と私は思いました。

(これ以上いると発見される)

で、私は帰りかけました。

ところで貴郎はこの私が、この時まで地下室の何処にいたのか、まだお解りになりませんまいね。

私はこの時まで十数人の者と——いずれも青幫の会員なのですが、——一緒に次の部屋にいたのです。

つまり私も彼等の一人として。

地下室は可成り広いのです。私達のいるこの部屋の奥に、繁青年や会長や、幹部達がいる部屋があり、尚その奥にも部屋があるのです。

十六

繁青年に対する命令、それが終わると他の会員が呼ばれ、——次の部屋へ呼び入れられ、悪事に対する他の用件を、又会長から云い付けられるのでした。で、私という会員達は次々にこの夜会長によつて、それぞれの仕事を命ぜられる可く、集まって来ていた連中なの

です。

「私はこっそり地下室を出ました。

森へ出るとホツとしました。

大変も無い毒気の中から、やつと逃れ出た人間かのように、本当にホツとしたのです。

守衛達は私を咎めませんでした。

会長から命令を受け取って、地下室から出て来た会員の一人だと、こう解したからでし

よう。

すがすがしい森の香を嗅ぎ乍ら、私はまるで歌うかのように、

「さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々のその中で……」と、こう小声で呟きました。

（役目を果たさなければなりません。……役目？ 殺人！ 恋人殺し！ 富豪の美しい令嬢殺し！）

（さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々とは併し何んだ？）

私はこのことを考えました。

大変詩的で美しく、ミスチックでさえある言葉であることよ！

(さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々！)

私は考えに耽ふけりました。

私が青幫の集会所の、地下室へ這入って行くという、この危険を冒したのは、会長の何者だかということと、もし探れたら何が故に、そう迄青幫の連中が、柵家へ仇あだをするのであろうか？ それを探り度い為ためからでした。彼等が、わけても会長が、催眠術を使うということ——そうしてその使う催眠術の一種、遠隔暗示で柵家の令嬢、初枝さんを精神喪失者とし——特に夜に於て夫れにして、八月二十日には以前に死んだ、二人の姉さんと同じように、無意識に、しかし自分の方から、死場所を目指して進んで行くように——そうしているということなどは、私は推察していたのでしたから、敢あえて地下室で探ろうなどとは、計画しては行かなかつたのでした。

そうして地下室へ這入って行った結果、会長の人物は見ましたが、何者であるかという点は——その素性という点は、結局知ること出来ませんでした。その上何が故に柵家へ、青幫の連中がそう迄執しゆうね念く、仇あだをするかということに就いても、発見することは出来ませんでした。

が、その代り「何ういう処ところで」初枝さんを殺そうとしているか？ その「処」暗示だ

けは、ゆくりなくも知ることが出来ました。

「処」とは何処か？

云う迄も無い！

「さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々」の中なのです。

が、其処は何処なのか？

そうだ、其処は何処なのか？

知らなければ不可ない！ 知る必要がある！ そうだ探す必要がある！

私は森を出て支那町へ這入り、城内を脱けて租界へ出、これという当もありませんでしたが、波止場の方へ歩いて行きました。

黄浦灘ダマロに立つて眺めた夜景は——上海の夜景は東洋第一の、貿易港としての上海の、雄大さと壮麗さと華美さとの、代表的のものでありましょう。近代文明——欧亜の粹と、欧亜の罪惡とを一緒に蒐あつめた、魔都の姿の大写であると、そういうことも出来ましょう。

絢爛そのもののようなネオンサインが、此方こなたの街衢がいくに輝いて居れば、対岸には宏壮のビルディングが、——上海製糸、川崎ドック、英米煙草会社、日華紗さしやう廠、そういったビルディングが窓々から、強い光度の電燈を、ふんだんに放射しています。

黄浦河上には各国の船が、——日本船や英国船や、仏国船や独逸船ドイツが、国々の趣味を現わした、さまさまの船体に浮かんでい、そのマストや甲板から、河上へ投げている電燈の光が、波の蜺うねりに従つて、繩のようになされるのも、美しい眺めということが出来ましよう。

十七

私は河上をぼんやりと眺め、矢張り考えて居りました。

(さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々とは何んのことだろう？ 何処にそういう処があるのか？)

すると其時そのうしろの方から、

「紳士、よい所へご案内しましょう」

と、迎とても仇あだつぽい女の声で、呼びかけるものがありました。

私はそこで振り返えつて見ました。

一見した所は令嬢だが、仔細に見るとまぎれもない、私娼やゆうしんそれも夜遊神やゆうしんと呼ばれる、

それであることが解りました。

此処でちよいとばかり通を云いますが、上海に於ける辻君には、大体二種類あるのです。夜の七八時から午前の一二時まで、人眼を引くような服装と化粧とをし、往來をブラさまよつて、客を引くところの夜遊神と、大馬路や四馬路の茶楼などへ行つて、客を引くところの拉的野鷄、つまりこの二種類なのです。

で、私に呼びかけた女は、その夜遊神でありまして、その夜遊神は私娼の中でも、下等に属しているもので、容貌も風采もみすぼらしくなければなりません。それなのに——呼びかけたその夜遊神は、今もお話したように、一見すると令嬢のように、美しくもあれば高尚でもあり、衣裳なども立派なのでした。

私の好奇心は湧き立ちました。

で、私はからかいました。

「よい所へ？ 有難う。行つてもいいね。が、どんな可いところかね」
すると女は云いました。

「紳士、兎に角参りましようよ。屹度ご失望はなさいますまい」

「成程、そうかも知れないね。……が、一体どの辺なのかね」

「たいして遠くはありません」

「君の家かね？ ホテルかね？」

「いいえ、どっちでもありませんわ」

「ははあ、そうすると石畳の上か」

「まあ、そんな、そんな下等な。……よい氎かもが敷いてございます」

「よい氎が、そりやア素的だ。……ベッドのスプリングも利いているだろうね」

「ホ、ホ、ホ、その通りですわ。……そうして可い音楽も……」

「よい音楽も聞かせてくれるつて。そいつは豪勢な話じゃアないか。……ところで代価は？ いくらなんだ？」

「ね、行つてからにしましょうよ。ね、そういうご相談は」

「いけないね、そいつはよくない、すべて取引は率直の方がいい。……で、率直にうかがうが、君の体を自由にするには、いくら程の資本が入用なのだい？」

「駄目よ、あなた、そんな無作法なこと。……ご案内すればいいんですわ。……だから一緒に参りましょうよ。……上等のバス、上等のお酒、……妾わたし一人だけじゃありませんのよ。他にも女の人居るんですわ。……ですからお好み次第ですわ。……よい絵画、よい

盆栽、よいシガー、よい光線……一切が備えてありますのよ」

(変だな)

と私は思いました。

夜遊神などというものは、のつげに代価を云うものなのに、この女はそれを云いませ
ん。

夜遊神などというものの巢は、あさましいみすぼらしいものであって、よい音楽だの、
よい風呂だの、よい絵画だのよい盆栽だのと、そんなものを備えてなんかいない筈です。

それなのにそんなものを備えているという。云い方に嘘は無さそうである。

(変だな)と思わざるを得ませんでした。

「一体どこへ行くんだい。何処へ連れて行ってくれるんだい？」

真面目に私は訊いて見ました。

すると女も真面目に答えました。

「さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々の所へ。……ね。ご一緒に参りましょうよ」

十八

私は一瞬間ぼんやりし、次の瞬間には用心しました。

この私の心の動揺は、貴郎あなたにも解つていただけでしょうね。

全く驚かされて了しまいました。

だって然そうじゃありませんか。

私が知り度たいと熱望していた「さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々」のいる所へ、そんな夜遊神が連れて行つてくれると、余りにおあつらえ向きに云つてくれたのですもの。

私はつくづくと女を見ました。

と、卒然と心の中へ、一つの疑問が浮かんで来ました。

(うん、この女、女じよハン幫バンだな)

それはこういう疑問でした。

が、女幫とは何んでしよう？

それに就ついて此処に文献があります。

これを読んでお聞きに入れましょう。

女幫

「青幫チンハン中には女匪も可かなり居るがこれもその仕事に由よつて四種に分類する事が出来る。

折梢せつしょう女友じょゆうというのは、女匪が巧たくみに金持のお嬢さん達と友達となり、或あるいは麻雀を勧め沢山の貸を作つてそれをたねに金品を強請し、金品の持ち出しが出来ない時は淫売を強いたりなどするので、そのやり方が頗すこぶる巧だから良家の娘さん達もウカと掛つてしまう。彼等女匪は、城隍じょうこうの前で誓ちかいを立て十姉妹しじまつと自称し、年に由つて老大ろうだいとか老二とかの称号をつけ、互たがいに連絡を取つて活動する。此の方法であたら花の蕾を踏み躪にじられた金持の娘さんが上海にも少くない。

女匪の働く悪事うちの中でも、串放かんほう白鴿はくこうの如きは最も驚くべきもので、それは女匪中の美人をどこかのお嬢さんに仕立て、田舎あたりのお金持ちの息子と結婚させる。それ迄までには例の如く巧妙な方法で相手方に取り入り、こつちのお嬢さんも立派な大家のお嬢さんとして立て通してその道筋をうまく運び、さて愈々いよいよ結婚してしまうともう占しめたもので、薄ノ口亭主の助平たらしいのに乗じ、せいぜいあまつたるい言葉を浴せかけて充分手玉に丸

め込み、それからそろそろ目ぼしい品物例えば首飾り、腕環、其他裝飾物、金銭などを少しずつ持ち出していつしかその家に大きな穴をあけるのである。

ある知事が嘗て上海城南の某公館に住んでいた事があつた。その鷹揚な態度と、出入する毎に自動車や馬車を駆る様子を見つけた一女匪は、家に帰つてこれを取り入れる方法を母に相談した。そこで母は女に盛装させ、その附近を徘徊させていたが、案の如く知事の目にとまり、請われて結婚する迄に漕ぎつけた。その時知事からは千元贈ろうとしたが、母は自分の娘は売女ではない。金は要らぬから自分も一緒に引き取つて呉れと言つて二人してその家に入り込み、知事が江西あたりに赴任する時もついて行つてそろそろ奥の手を出し、金品をかくし始めた。そしてもういい時分だと頃を見計らい、上海に遊びに行きたいから、暇を呉れと言つて家を出で、上海には来ないで知事の郷里に行き、知事のおやじに向つて知事さんは今度道尹になる。それに就て運動費が要るから一万元ばかり呉れと、出鱈目の嘘八百を並べ、まんまと大金をせしめて上海に帰り何食わぬ顔していたが、驚いたのは知事とのおやじで、詐欺にかかったと気づいた時は家がからつぽになつていた。そこで早速手続きをして上海を探した結果、この女匪は某遊戯場で捕えられたそうである。此の種の罪悪は、女匪の犯行の中でも許すべからざるものである。女匪の中には博

奕専門の奴がいて、金持の家族に接近しそして賭博に誘い、大金を捲まき上げる。博奕を開いた最初一日二日は態わざと負けてやり、その間に向うの手筋を看破し、且かつ骸さい子の印しるしを覚えて置いて、それから捲まき上げに掛る。時には又女匪自身が大家公館に夫それ々つて伝手つてを求めて入り込み凄腕すわを振うこともある。之等これらの女匪を女じよ子しやう郎らう中ちゆうという。

度胸すわの据すつた或いは手先の特別器用な女匪は、窃盗の手先や掏摸すりになる。匪徒が窃盗するには先ず女匪をして家内の様子を偵察せしめ、そして時を計って入り込み、仕事をするので、その手先が第一番に捕まえるのは、婢僕である。

嘗て某公館がこの手でウンとやられた事がある。或日そのこのアマが裏門のそばで洗濯していたら一人の巫女がやって来てそのアマに向い、お前の身の上には今に大変なことが起つて来る。お前の印堂の黒いことはどうだ、ああ怖い怖いと言ったので、簡単なアマは大変吃驚びっくりし、どうしたらこれを避けることが出来ようかと援たすけを求めた。巫女は鹿爪しかづめらしく、お前が今日わしに逢うたのはせめてもの幸さいだ、ここ二三日遅れたらもう取り返しがつかなくなつた。そこでその禍わざわいを解く法だが、余計は要らないからお礼としてたつた三十元お出しなさい、早く出さなけりや遅れると大変だぞと言って威おどしつけた。アマは泣きそうな顔をして、アマ位あま位いしていて三十元の金がある筈がない。十元にまけといて呉れと頼んだ。

巫女は自分を信用せしめるために、自分の役目は人を救うのであるから貧乏人からは金は取らない。それで家人に紹介して呉れと言ったので、アマは大変喜び早速これを承諾した。そこで巫女は一本の針を取り出し自分の臂ひじから血をとりそれを符につけて与え、別に又紙にそつと薬を包み仙水だと言って飲ませ、そして何日の何時いつ頃線香蠟燭をあげてお祈りしたらすぐ癒ると本当らしく教えて立ち去った。翌日になるとアマは変な病気に罹かかりぼんやりして不吉な事ばかり言うようになった。家人は不ふ凶と昨日来た巫女の話聞き、早速その通りお祈りすると、不思議にも二三日して悉すつかり皆癒った。家中うちの人々は大いにこれを奇とし、巫女の住所をアマに聞いたが知らない。兎に角不思議な巫女だと感心している。巫女の飲ませた薬の為ため一時病気を起したなどは夢にも知らない。半月計ばかりしてから巫女がその家に来たので、アマは、仙人が来た仙人が来たと言ひ叫び、内うちの主人もお前さんに逢いたいと言って待つているから早く内にお入りなさいと言って迎え入れ、主人に紹介した。巫女は主人の求めによりその相を觀て曰く、あなたの相は大変宜よろしいが、と言って急に驚いて起ち上りあなたの命はどうも危ない。今年が厄年になっている。これは家相が悪しようだと言って、家中隈くまなく見て廻り、どこにこんな物がある、どこに入口があり、家族は何人と悉皆探偵が出来て仕舞った。

それから二三日経つてその公館に泥棒が入つて、金銀珠玉及び現金等数千円を強奪して去つたが後になつてその巫女が泥棒の手引をしたことが判つた。こんな例は外にも沢山ある。

(女幫なら^{ちようど}恰度よい。よし、云うなりになつてやろう)

私は其処で云つてやりました。

「よろしい、行こう、案内してくれたまえ」

女はチラリと私を眺め、意味ありそうに笑つてから、先に立つて歩き出しました。

私は歩きながら考えましたよ。

(この^{ホアンプー}黄浦河の河岸は、何んと俺には運命的なんだ！ 繁青年に話しかけられ、今度の事件に捲き込まれたのも、このホアンプーの河岸なら、この不思議な夜遊神に、突然話しかけられて、不思議な処へ連れて行かれるのも、このホアンプーの河岸だ。

ホアンプー！

黄浦河！ 上海の動脈、生命線！ そのホアンプーは俺の宿命だ！)

事実その通りであつたのです。ホアンプーは私の宿命でした。

だんだんお話しして行く中に、お解りになることと存じますがね。

×

×

×

さて貴郎、親愛なる貴郎、私の長話を大変神妙に、謹聴して下さる親愛なる貴郎その貴郎へ申し上げて置きます。これからお話しする私の話の、その話の話しぶりに、充分ご注意下さいとね。

と云うのは私は必要上から、写実的にお話ししないで、象徴的にお話しするからです。神秘的、夢幻的、超現実的——こう云ったような話しぶりであると、然^そうも云うことが出来るかもしれません。

×

×

×

さて此処は「さまよう町の、さまよう家の、さまよう人々」の、住居をしている処です。何時の間にか私は例の女によつて、此処へ案内されて来たのでした。

十九

町の道を歩いて行きました。

さまよう町の道をです。

大変細くはありましたが、綺麗で平坦で掃き清められていて、すがすがしい程でありました。

その道の左右には家々がありましたが、いずれも洋風で高尚で、こぢんまりとして居りまして、どの家もおおよそ同じ大きさで、門のドアなども似たようなもので、建築法や都市美観を、極度に参^{さんしやく}酌して作ったということが、よく頷かれる次第でした。

往来している人達も、大変上品で美しく、瀟洒としていて気持がよく、それに話し合う声なども、小さくて丁寧でありました。

みんな仲よく、みんな愉快そうで、そうしてみんな何か一つの共同の目的に向かっていると、そんなように思われる人達でした。

男達の中には老人もあり、青年も中年者もありましたが、女達の中には不思議な程、ひどい年寄は見受けられませんでした。

このことがこの町をいよいよ美しく、はなやかなものにしていました。

十五六から三五六迄の、いずれも縹^{きりよう}緻のよい女達が、年相応にお化粧をして、心持ち派手な服装をして（そう、お化粧もどつちかといえ、可^{かな}成り派手な方でした）町をゆ

るやかに歩きながら、軽快に朗ほがらかに媚ほとんを含んで、時には蠱惑的の流ながしめ瞥さしめさえして、男達と何んのわだかまりもなく、時には殆ほとんど性的の方で、無道德だと思われる程にも、自由に大胆に話し振舞い、それが普通だとしている様子は、寧むしろ私には快い、好感の持てる風景でした。

娯樂的建物というよりも、娯樂的設備と云った方が、よろしいように思われますが、そういうものが可成り豊富に、この町には設備されて居りました。

一つのラウンジでは優秀なバンドが、優秀な音楽を奏していました。ラウンジの広さは二百畳敷ぐらいで、天井の中央はドームになって居り、色彩絢爛の色硝子が、交互に張った装飾を持ち、その胴壁には七層朝顔型の、黄金色硝子の装飾電燈こがねが、舞台へ光線を投げかけていました。用具はいずれもマホガニー製で、床は矢筈組檜木張やはすで、その上に高価なカーペットが、ずっと敷きつめてありました。

何んと高尚で、こぢんまりしていて、贅沢に出来ているラウンジなのでしょう。

音楽を聞いている人達は、大概礼装をして居りました。女はドレスでありましたし、男はタキシードか燕尾かでした。

自由に寛くつろいでもたれ合ったり——女と男とがもたれあったりして、音楽を聞いているの

でした。

私も其処でほんの僅わずかの間、音楽に耳を澄ましましたが、それよりこの町の芸術的の諸所を、もつと見たいと思いましたが、ラウンジを出て町を歩きました。

ふと私は随分立派な、ギャレリーの中へ這入って行きました。

伊イタリ太利中古フロレンチン式に、装飾されてあるこのギャレリーは、全く立派なものでした。

よい絵画がかかって居ました。

超現実派タンギーの絵画「マダムと仙人しやほてん掌」がかかっていたのには、すっかり感心してしまいました。

タンギーは貴郎もご承知でしょうが、あの荒涼たる不毛の砂地と、そうして不可能の壮大さ——こういうものを連想させる、全く独創的天才画家で、その絵は得がたいとされていますのに、その絵がかかっているのでした。

でも私は其処を出て、ブラブラ町をさまよいました。

そうして何時ともなく、しかし自然に、一つの喫煙室へ這入はいって行きました。

これも立派な造ぞうさく作でした。

ウイリアム・エンド・メリー様式で、英国材の胡桃くるみを用い、雅趣のある素地すじろうみがき蟬磨せみぎに、おおよそがなつて居りました。正面中央には伊太利産らしい、大理石の枠を持った大煖炉があり、丸透彫まるすかしぼりの前飾たしかも、確たしかに勝れたものでした。

大柱はマホガニーでありまして、華麗極まる大理石模様を、総体に現わしているところなど、エレガントと云つてもいい程でした。

二十

窓が両開き硝子扉ドアであり、華麗のカーテンがかかつて居り、床が護謨ゴム敷敷になつて居り、煖炉の前にオリエンタルカラーの、段通だんつうが一面に敷いてあるのも、好ましい趣味でありましたよ。

文机、円テーブル、長椅子など、ことごとく上等なものであり、それに倚よつて男女の人々が、麻雀だのポーカだのをやっていました。

可成りの額を賭けているようで、時々亢奮した勝負の声があちらこちらから起こりました。

私はそこではばらくの間、賭事を眺めて居りましたが、やがて其処を出て往来へ出ました。

と、行手の曲り角を廻つて、私を此処へ案内して来た、例の女が近寄つて来ました。

「お気に入りまして、え、貴郎？」

「気に入りました、よい所ですね」

「お食事は如何いかが？ 何か召しあがつては？」

「ではご案内願ひましょうか」

「いらつしやいまし、こちらなのよ」

で私は女について——女の名は黄蓮ホアンレンといひましたが——少しばかり歩きました。

と、私達は何時の間にか、立派な食堂へ来ていました。

仏国現代式装飾だなど、こう思ひながら食堂の内部を、黄蓮とペパミントを飲み乍ら、

私は仔細に眺めました。

天井は随分高くありました。柱は楕円形で太くありました。その天井とその柱の内部に、隠されて点されている電燈から、軟かい光が放射されて、それが室内を照らしているのが、特殊的でありました。

正面中央にある飾棚も、最新式のものであり、それに対した後方の壁には、飾配膳棚が備えつけられてあり、これも趣味を極めたものでした。左右の両壁には驚くばかりに、精巧を尽くした仏蘭西製の、寄木細工の壁画が二面、堂々とかかげられてありましたが、それは有名なベルサイユ宮殿の、庭園を現わしたものでした。

ドーム前端的階上に、奏樂室がありまして、そこでは音楽を奏していました。

「何うオ」

と黄蓮は云いました。

「妾わたしの処へいらつしやいましな」

「うん」

と私は応じました。

「ひとつ款かんたい待にあずかろうかね」

「妾で勿論いいんでしようね」

「いいとも、結構、君が好きだもの」

「でも他にも美しい人が、随分いると思わなくって」

「居りますね、ふんだんにいる」

「どの人だろうと大丈夫なのよ。……でも約束の出来ている人はねえ」

「いや君で充分だよ」

私はこう云つて日本人好みの、細面できやしやな黄蓮の顔を、好意を以^もつて眺めました。

「しかしもう少し見て廻り度^たいから」

「ではその後でいらつしやいな。……妾の所、知つていらつしやるわね」

「後で行こう。知つているとも」

二人は食堂から外へ出て、辻で左右へ別れました。

それから私は急の坂を、下の方へ下りて行きました。

何も下の方に私の興味をそそる、特別のものがあると思つて、下りて行つたではありませんでした。

下の町も上の町とよく似ていて、細い往来は清潔であり、往来の左右の家々は、いずれも同じような形であり、そうしていずれもこぢんまりとしていました。

が、大体に上の町よりも、ずっと遙に質素であり、みすぼらしくさえありました。

ひとつにはこの町に不思議な程にも、人が住んでいないからでした。

いや嘗^{かつ}ては住んでいたが、現在は、少くも今日の夜は、殆^{ほとん}ど誰も住んでいない。――

と、そんなように思われるのでした。

往来についている電燈の光も、で、ずっと暗くあれば、家々の窓からは云い合わせたように、燈火の光が洩れて来ないのでした。

さよう事実そうなのでした。

どの窓からも電燈の光が、殆ど洩れて来ないのでした。

勿論まばらに、ほんのたまたま、往来を人が通りましたが、その人が上の町の人とは異^{ちが}い、サラリーマンか高級労働者かと、そんなように思われる人ばかりでした。

二十一

私は更^{さら}にもう一つの坂を、下の方へ下つて行きました。

と、また町がありました。

しかしその町は私の心を、憂愁にさせるに足るばかりの、陰惨としたものであり、事実私は夫^それを見て、憂愁の想いにとらえられました。

その町は寧ろ町むしというより、巨大な数個の合宿所——それも貧しい人々の、合宿所の集団そのものであると、そう云った方がいいような、そう云ったようなものでした。

何処かに工場でもあると見えて、エンジンの音、ダイナモの音、調革ベルトの廻る音などが、可成り烈はげしく聞えていました。

ところが何うどでしょうその町にも、人は殆どいないのです。

で、まるつきり廢墟あかりのようなのです。

燈火も暗く闇と云つてもよく、万事がひどくみすぼらしいのです。

私は悲しみを覚えましたよ。

そうしてこんなように呟つぶやきましたつけ。

「何んとこの町は——さまよう町は——階級がハッキリしているんだ！ブルジョアの住居まい、プチブルの住居、プロレタリアの住居とハッキリと、三つの階級に分けられている」

この事が私を不快にしました。

で私は坂を上つて、プチブルの住居へ帰つて行きました。

それから更に一番上の町、ブルジョアの住居へ行こうとして、プチブルの町の細い往来を、少しばかり歩きました。

と、一つの窓の中から、女の泣声が聞えて来ました。

そこで窓から覗いて見ました。

窓の内側には燈火も無く、只窓から射し込んでいる、幽かすかな外光によって内側が、ぼんやりと見えるばかりでしたが、その窓の内側に、半裸体の若い娘らしい女が、寝台に倒れて泣いている姿が、いたいたしく眼に映りました。

窓はほんの小さいもので、硝子とカーテンとで蔽おほわれて居り、そのいずれもがほんの少しづつ、開いているのでありました。

女の様子や女の泣声が、大変憐れでありましたので、私は思わず声をかけました。

「もしもし貴女、どうしたのです？」

すると女は驚いたように、窓の方へ顔を向けましたが、その容貌は美しく、そうして真面目で無邪気だったので、私は感動うたぐされました。

女は私を認めましたが、最初は疑うたぐつてでもいるように、只凝視みつめて黙っていました。

が、不意に叫びました。

「どうぞお助け下さいまし！ 此処から出して下さいまし！」

「……………」

私は唾然としたでしょうか？

いいえそんなことはありません。

この町がどういう町であるか、この町にある家々が、家々に住んでいる人々が——更に率直に繰りかえして云えば「さまよう町のさまよう家のさまよう人々」の如何なるものであるかを、既に確かめている私にとっては、この女がどういう女であるか——どういう運命で此処へ来て、今何ういう運命にあるか、そうして私が助けなかつたら、将来どういう運命になるかを、これ又知つて居りましたので、決して唾然とはしませんでした。

「よろしい」と私は云いました。「出来るだけお力になりましょう。……併し果たしてこの私に、貴女をお救いする力があるか何うか、これが実は覚おぼつか束ないのです」

「いいえ大丈夫でございます。私のことを日本の領事館へ、至急お知らせ下さいましたら、妾は助かるのでございますから」

二十二

云いおくれましたがその女は、日本ムスメだったのでございます。

「それは屹度引き受けました」

こう私が云った時に、私は私の背後にあたつて、物の氣勢けはいを感じました。

で、敏捷に振り返り、素早く拳を揮ふるいました。

私の足下へ倒れたのは、鞭を持った獐ねいもう猛な支那人で、そのポケットにはピストルが一挺、ちゃんと隠されてありました。

(事情は随分切迫しているらしい)

こう私は感じましたので、

「どうです貴女、大丈夫ですか？ 今夜一晩大丈夫ですか？」

こう急いで訊いて見ました。

「何んでございますの、大丈夫かとは？」

「貞操のことです、貴女の貞操……」

「守ります！ 屹度、守って見せます！」

「何時貴女ここへいらつしやつた？」

「はい、今から三日前に」

「三日前に、それはあぶない、彼等は彼等の掟として、三日以上は待ちませんよ」

「でも妾、きつと頑強に……」

「いや夫れそよりこうなさいまし」

私は思い付いて云いました。

「私の恋人におなりなさい」

「……………」

「私に今夜買われなさい」

「不可いけません！ 貴郎も、まあそんなこと！」

「いや誤解しては不可たせん。只それは形式なのです。つまり然ういうことにして、貴方の貞操を守ってあげましょう」

女は合点がついたようでした。

うな垂だれて細い声で礼を云いました。

(さてこの野郎だが何うしたものかな)

気絶している支那人を、私は足でこづき乍ら、その始末を考えました。が、どうせその中に蘇生するのですから、何処かへころがして置けばよいと、こう思つて少しばかり離れたところにある、四辻の隅へ引つ張つて行きました。

それから一時間も経った頃、私とその娘とは上の町の、迎も華麗な寢台ベッドづきの部屋で、静に話して居りました。

娘の名は澄子と云い、十九歳だということでした。

よい体格のしつかりした気象の、好感の持てる娘でした。

澄子は身の上を語りました。

それによると彼女は名古屋の産れで、女学校も卒業し、職業婦人になろうと思つて、いろいろ職を求めたが、思わしい職業が見付からない。それに彼女は見掛け以上に、志操も堅固であれば大胆でもあり、冒険心と猟奇心とに、可成りに富んでいたところから、この頃盛んに日本の内地で、上海に於ける自由の生活が、銀安ぎんやすの噂と相俟あいまつて語られ、ひどく好奇心をそそるところから、彼女は思い切つて上海まで出て行き、変わった世界を見ると共に、生活の方法を立てようと、いろいろ伝手を求めたところ、友人に知己が上海領事館に書記として勤務をしていたので、その人に紹介をして貰つたところ、来てもよいという返辞であつた。

そこで是も友人これの知己で、上海へ行く人があつたので、その人と同行して三日前に、この上海へ上陸した。領事館の書記の某という人から、差し廻された自動車があつた。で、

彼女は同行者と別れ、その自動車へ乗ったところ、領事館へは行かないで、このようなところへ連れて来られ、すぐ一室へ監禁されたあげく、娼婦になる可く強要された。勿論彼女は承知しなかつた。

と、彼女は折檻された。

そうして今日に及んだのである。

——と云うのが彼女の話でした。

「上海にはザラにあることです」

私は彼女にそう云いました。

「もう私がお眼にかかった以上、どうともしてあなたはお助けして見せます」

そうも私は云ってやりました。

二十三

彼女は礼を云いました。

すっかり安心している様子なのです。

この部屋も随分立派でした。

ソファー、アームチェア、ライティングデスク、それらの物は鞣革なめしがわと、紫檀とで出来て居りました。

花卉かきを描いた優れた油絵、美女を描いた日本の版画、それらは名ある物でした。

桃色の絹の蓋おおいを冠おおいつた、電気スタンドの軟やわらかい光が、ダブルベッドの純白の敷布を、催情的に色づけてもいました。

窓があつて其窓にも、桃色のカーテンがかかっていました。

窓の向うを通つて行く人の、ひそひそとした会話なども、おおらかに聞えて参りました。

「ラウンジダンスがはじまつているよ」

「そうね、行つて踊りましょうよ」

などと話して行く者もあり、

「ね、今夜は飲み明かしましょうよ」

「うん、よかろう、シャンパンでも抜こう」

などと云つて行く者もありました。

(さて是から何うしたものだ?)

私はここで考えました。

この女にオールナイトの玉ぎよくをつけて、私一人だけがこの町を去って、日本領事館へ出かけて行つて、この女——澄子の知己なにかしだという某書記官に事情を話し、それから官憲へ依頼して、この町から澄子を取り返すことは、何んでも無いことでありましたが、それでは余りに平凡であり、そうして私としてはそんなこと以外に、柵家に関するいろいろのことで、この「さまよう町」に就いてこの「さまよう家」に就いて、もつと知り度たいことがありましたので、今急に此処を立ち去ることが、出来がたいように思われました。

(さて是から何うしたものだ)

不図よい考えが浮かんで来ました。

で、ボーイを呼びました。

「黄蓮を呼んでくれ給え」間も無く黄蓮がやって来ました。

黄蓮は人の好い女でした。

お前の代りに澄子という女を買うよ、だからマネージャーに交渉してくれ——こう私が頼んだところ、厭いやな顔もせず頼みに応じ、マネージャーに交渉してくれた程でした。勿論その代りお礼として、少しばかり金はやりましたが。

それより此処のマネージャーが、その澄子が一議に及ばず、私という人間に買われてもよいと——つまり是迄^{まで}、三日の間、頑強に断っていた娼婦としての勤めを、つとめることを承知したことを、どんなに驚いたか知れませんでした。

「黄蓮」と私は話しかけました。

「君は何時頃から此処にいるのだね？」

「そりゃア随分以前からだわ」

「以前からって、何時頃からだい」

「そうですねえ、三年も前から」

「三年も前から。こいつは古いなあ。……それでは一つ聞きたいことがあるが、去年の八月二十日という日に、一人の日本のお嬢さんが、此処へ入り込んで来たかたかね？」

「去年の八月二十日ですって？ 随分昔のことなのね、何うだったかしら、……でも何んなお嬢さんですか？」

「美しい上品な上流の家庭の、典型的のお嬢さんなのだ。柵潮子さんという人だ」

「あ、その人なら知っていますわ」

「ほー、知っているか、それは有難い」

「変った事件がありましたのでね、それで妾おぼえているんですわ」

「ねえ黄蓮」と私は云いました。

「その変った事件というのを、詳しく話してくれないかね。僕は是非とも聞きたいんだが」
こう云つて私は若干の金を、又彼女にやりました。

「ええええよろしゅうございますとも、知っているだけ妾お話ししますわ」

作者附記——この不思議なさまよう町のさまよう家に於て、黄蓮というさまよう女が話す話は何か？ それに、さまよう町のさまよう家、その物の正体は何か？ 読者諸君よ、次号以下に於て夫れらの疑問は解かれるであらう。期待されんことを。

(以下中絶)

青空文庫情報

底本：「国枝史郎探偵小説全集 全一卷」作品社

2005（平成17）年9月15日第1刷発行

底本の親本：「探偵」

1931（昭和6）年7月～11月

初出：「探偵」

1931（昭和6）年7月～11月

入力：門田裕志

校正：北川松生

2016年3月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

さまよう町のさまよう家のさまよう人々

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>